

人物

みのかも

② 坂井範一

岐阜県近代絵画の開拓者

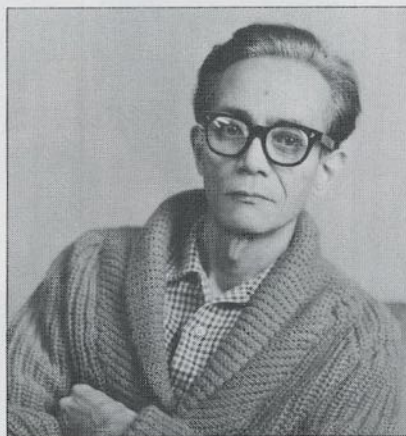
岐阜県近代美術の開拓者であり、また美術教育の指導者であった坂井範一は、明治三十二年（一八九九）二月十四日、加茂郡蜂屋村中蜂屋の農家に、七人兄弟の長男として誕生した。

範一少年は幼少より絵画に天稟の才を示した。蜂屋小高等科二年のとき、生家の近くの浄明寺の住職、蜂谷乗願の肖像を木炭画で描いたところ、壇家の人たちから絶賛を博し、住職の没後もこの肖像は庫裡に掲げられ、ありし日を偲んで涙ぐむ人もあったという。

高等科三年を卒業した彼は、蜂屋小の教員となったが、校長有賀好風のすすめで、岐阜師範に進学した。師範学校では野球部に入り、同校ではじめて硬式野球を導入、はじめ投手として後には捕手として活躍した。また在学中、京都で帝展（帝国美術展）を見て感銘を受け、美術学校進学を決意した。美術学校卒業後は岐阜女子師範に奉職したが「憩へる女」が第七回帝展に初入選、さらに「裸婦」が第八回帝展に入選するに及んで

画業に専念することを決意し、女子師範を退職、再び上京して藤島武二に師事した。

この頃、文部大臣松田源治は美術統制をねらって、帝国美術院の改組を発表して混乱をまねいた。



略歴→明治32年加茂郡蜂屋村中蜂屋（現蜂屋町引田）に生まれる。昭和27年より10年間、岐大教育学部教授。

昭和56年紺綬褒章受賞。同年5月、没、享年82才

坂井範一が中央画壇において既に輝かしい業績を残しているにもかかわらず、戦後岐阜

した彼は、帰国後、戦火を避けて岐阜に疎開したが、戦後も岐阜に留まって制作を再開した。

戦後の主な作品としては、竹林に材をとった「竹シリーズ」や、「赤い花」（市文化会館蔵）、「黒い花」などの「色と形のシリーズ」、さらに晩年、源氏物語に材をとった「古い物語シリーズ」があるが戦前のはげしい色彩のコントラストは、次第に落ちついた色彩の調和を見せた作品に変化している。

坂井範一は、この改組に反対、芸術運動の純粹化を目ざして猪熊弦一郎、小磯良平らが創設した新制作派協会に参加した。そしてここを舞台にして、キュービズム（立体派）の影響を受けた「洲の暁」をはじめ、「船の製作所」「縦の風景」などの力作を次々に発表した。この期間は彼の戦前の黄金時代であったといえよう。

太平洋戦争で中国や南方に従軍

にあつて上京しなかつた理由については不明であるが、彼が郷土の美術教育活動に献身しようという意図があつたことが理由の一つと考えられる。

戦後間もなく岐阜県および東海地方における若い芸術家グループの指導をかって出たのははじめ、二十七年より十年間にわたり岐阜大学教育学部教授として、さらに岐大退官後は愛知女子短大・東海



花 蜂屋小学校所蔵

女子短大の教授として多くの美術学生の指導に当つた。また下呂小学校の絵画集「下呂の子たち」の出版にも協力した。「教育というものには偉大なものがある。若芽ばえの中には偉大なものがすでにある」というのが彼の残したことばである。また郷土愛の強い彼は母校蜂屋小はじめ、美濃加茂市の施設に貴重な作品を次々と寄贈した。

晩年、健康を害し病臥することが多かつたが、五十五年十一月の市文化会館落成式には病いを押し出席、参列者を感じさせた。

彼は永年の業績により勲四等瑞宝章など数々の賞を受け、さらに五十六年春には紺綬褒章を受けたが、その頃から風邪が悪化して気管支炎を併発、五月十七日ついに永眠した。八十二才であつた。

県美術館では彼の画業を顕彰して、五十八年春「色と形の世界・坂井範一展」が開催され、観覧者に多大の感銘を与えた。

今回は、大畑市太郎です。